

## 1. 特に効果的であり改善に資した事例について

### F. その他

#### ②国際シンポジウム等の開催

##### ●広島大学教育学研究科教育人間科学専攻

##### 「Ed. D型大学院プログラムの開発と実践」の事例

(具体的に何を実施したのか)

- ・平成19年度には、本学の教員及び大学院生を、兵庫教育大学において開催された公開研修会に参加させた。また、教員養成を担当する大学教員をおもに養成してきた研究大学院を、ドイツ、アメリカ、中国、ベルギーに訪ね、本プログラム実施に関する協力関係を構築するとともに、関係する資料を収集した。加えて本学に、ドイツの訪問大学から大学院教育担当者を招聘し、プログラム課題に関わる日独国際シンポジウムを開催した。大学教授法の改善のためには、慶應義塾大学大学院経営管理研究科から高木晴夫教授らをお招きし、ワークショップ「ケースメソッドによる専門職者養成の可能性を探る」を開催した。さらに、北京師範大学、ブラウンシュヴァイク工科大学、ロンドン大学から関連研究者を招聘し講演会を実施した。
- ・平成20年度は、19年度に引き続き国内外の主要大学の視察、調査を実施するとともに、海外の大学教授センター等における研修に大学院生を参加させた。また、大学院教育に関する協働研究を展開するために、北京師範大学から大学院教育担当者を本学に招聘し、プログラム課題に関わる日中国際シンポジウム「日中における教育学研究の最前線」を開催した。さらに、アメリカのフロリダ州立大学から大学院教育担当者を招聘し、アメリカの大学におけるTAシステムをテーマにした講演会を開催した。この講演内容を踏まえて、本学の大学院生が同大学を訪問し、TA研修ワークショップへの参加、秋学期の実際の授業でのTA業務の担当などを行い、実際的なスキルを学んだ。加えて、ドイツで開催された若手研究者向けのプレゼンテーションスキル発展のための研修にも参加した。教授スキルの幅をさらに広げるために、慶應義塾大学大学院経営管理研究科から高木晴夫教授らを招き、教員養成・研修の具体的事例に基づくケースメソッドのワークショップも開催した。
- ・最終年度にあたる平成21年度には、海外の大学教授センター等における研修として大学院生を、アメリカのインディアナ大学およびフロリダ州立大学、イギリスのロンドン大学ならびにイーストアングリア大学のTA研修に参加させた。また、本プログラムに従事している大学院生たちは、インディアナ大学で開催されたInternational Society for the Scholarship of Teaching & Learning

において、本取り組みの可能性についてポスター発表した。さらに、国内外の著名な研究者を招聘して広島大学で開催された国際シンポジウムでも、彼らは、本取り組みの成果と課題について報告し、海外の先達の研究者の評価を受けた。

**(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)**

- ・海外における活動においては、大学院生どうしの相互交流を積極的に進めた。
- ・本取り組みの成果に関する評価が独断的なものにならないよう、この分野での先達である外国人研究者より客観性を期した評価を得るよう配慮した。
- ・国内外での研修や国際シンポジウムにおいては、本取組を広島大学全体に普及する、あるいは、「広島大学での取組」を全国発信するための方法について検討するといった視点を常に維持するよう努めた。

**(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)**

- ・これまで、日本で受講してきた講義形式の授業しか知らなかった大学院生が、海外の先進事例を視察したり、調査することにより、単なる理論的な理解を超えて、さまざまな教授スタイルやカリキュラム編成のあることを知ることができた。この成果は、TAとして実際に教育実習を行う上で、きわめて有益な経験となった。
- ・日本のTA制度のモデルとなったアメリカで本格的なTA研修に参加したことで、TA制度がうまく機能するためには、授業内容の標準化や教授法の確立、TAの仕事への敬意が不可欠になることを、大学院生は実感として知ることができた。TAとして担当する授業の成否は必ずしも授業担当者の個性や経験のみに左右されるわけではないことに気づけたことで、大学院生のみならず教員も、TA制度を支える基盤を確立することの重要性を強く認識できた。これは、「教職課程担当教員の資質能力向上を可能にする環境整備を、組織としていかに行うか」を考える際に示唆を与えてくれる大きな成果であった。